

誕生物語

第1回 春日 文・山川智

昭和歌謡

『お富さん』は 岡晴夫の代役で唄った。 だからか、春日は 終世この曲を嫌ったという

春日八郎『お富さん』

流れてきた曲は軽快だった
張りのある声は、デビューから
さほど間もない春日八郎だった

歌舞伎通は「おや？」と思った

「お富さん」を言えば、切られのち「お富さん」
唄みと進路で、イヤサこれお富、
ひさしぶりだなア……は名科白。
こんなに明るく調子のいい曲に
なるとは、実に生きていたとは
お祝儀さまで知らぬ私のお富さん
んだな」と、「与話橋 浮名横櫓」
の一場面を思い出した
苦笑したかもしれない

春日八郎は運来の歌手だった
大正13年生まれの日日は、
28でデビューし、この時30歳
が、その後は紅白歌合戦に21回
出場するほどの大歌手となった
当時の演歌なら三橋三智也、村田
英雄、三波春夫、春日である
春日八郎の歌声は、明らかに
耳朶に残る開拓的な音声だった

平 成3年8月22日、筆者
は大阪新歌舞伎座に
いた。

昭和63年、春日八郎は「演歌
の心を平成に残したい」とい
う思いを込めて、三橋三智也、
村田英雄と共に「三人の会」を
結成。ところが、翌年、糖尿
病と肝機能障害を発症、左大
腿骨にも腫瘍が発見された。
劇部にも腫瘍が発見された。
だから、今回は久しぶりの「三
人の会」のステージ。病を押し
て出演した春日は、杖もつか
ずに立ち上がり、そして、熱
唱したのが「お富さん」だった。
この曲は、お富と切られと
三郎。でお馴染みの「与話橋浮
名横櫓」をモチーフに、山崎正
が詞を書きおろし、渡久地政
信がジャズのブリギにも共通す

る沖縄民謡のリズムを取り入
れて書いた曲だ。発売は昭和
29年8月。年末までに50万枚
を売り上げる大ヒットだった。
だが、春日自身は「この歌は
好きじゃない。俺の歌とは違
うような気がする。仕方なく
歌っているんだ」とよく周囲
に漏らしていたという。
というのも、この曲は当時
歌謡界のトップスター、岡晴
夫のために企画されたもので、
岡がレコード会社を移籍した
ため春日に回ってきた、いわ
ば、彼はピンチヒッターだっ
たからである。

なるほど、「お富さん」だけ
が、その後に発売される哀愁
に満ちた「春日節」とはイメー
ジが異なるのはそのためだ。

福島の貧農の家に生まれた
春日は10代で上京。戦前、浅
草で見た「藤山一郎ショー」に
魅惑され、昭和23年にキング
レコードの歌手募集に応募し、
準専属歌手となった。しかし、
『赤いランプの終列車』でよう
やくデビューできたのは昭和
27年の暮れのこと。実に4年
の歳月を要していた。
『お富さん』を発売したのは、
その1年半後のことだった。
新歌舞伎座での取材から、
ちようとうと2か月後の10月22日、
レコード会社関係者からの電
話で春日の訃報を知った。
亡くなる直前、春日は「どう
しても帰りたい。自分の部屋
の畳の上で寝たい」と、一時帰
宅、4人の娘たちと、6人の



「与話橋浮名横櫓」の「源氏店妻宅の場」。
与三郎は五代目尾上菊五郎、
お富は五代目尾上三郎/明治25年9月、歌舞伎座

孫たちの顔をまぶしそつに見
ていたという。

「もう一度歌えるかなあ……」
そんな春日の問いかけに、
夫人は手を強く握り返し、励
ますような大きな声でいった。
「歌えますとも！」

これが最後の会話だった。
棺の中には紺色のステージ衣
装が納められた。そして、弔
問客によって合奏されたのが
この『お富さん』だった。

Yoshikane Chit

1962年東京生まれ。テレビ制作会社
制作は監督を経てフリーランスに。
著書に『東方神起の謎』『東方神起
J-POPをゆく』『共にイースト・プレス』
『ビューマンドキョウメント 幸せのまじり』
『リアル出版』など。
また、出版プロデュース作品として
『生きる 義家弘光(ニースター)』として
『アキバの休日』『狂気キル(共にイースト
プレス)』などを著す。